

大学生の学習意欲と学力低下に関する 大学教員の意識についての調査研究

研究開発部試験臨床研究部門 石 井 秀 宗
(現職 東京大学大学院教育学研究科)
研究開発部試験臨床研究部門 柳 井 晴 夫
研究開発部適性試験研究部門 椎 名 久美子
統計数理研究所調査実験解析系 前 田 忠 彦
研究開発部試験作成支援研究部門 鈴 木 規 夫
東北大学大学院教育学研究科 荒 井 克 弘
東京大学大学院新領域創成科学研究科 大 竹 洋 平

平成12年度から13年度にかけて、文部科学省からの委託を受け「高等教育学力調査研究会」は、全国国公立大学で学ぶ3万3千名の学生に対し「大学生の学習に対する意欲等に関する調査」を実施し、その結果を公表した。学生を対象とする調査は大学生の学力や学ぶ意欲、及びその関連要因についての貴重な知見をもたらすものと言える。しかし、この調査は大学生にのみ実施されたものという意味で一方的なものである。

そこで本研究では、全国の大学教員が、現在、自分が教えている学生の学習意欲の強さ、および学力低下の有無についてどのように評価しているか、また、学習意欲および学力低下の傾向

が見られると評価された場合、それらの傾向はどのような側面について見られるのかという点を検討し、さらに、学生と教員の間に存在する認識のずれ(乖離)を明らかにすることを目的とした。

全国国公立408大学・600学部の教員約25,000名を対象に大学生の学力低下及び学習意欲等に関する意識調査を実施し、11,481名の教員から回答を得た。その結果は以下のように要約される。

まず、大学生の学力低下に対する教員の意識として、次の9点が明らかにされた。

1) 最近の大学新入生は、論理的思考力や表現力、主体性などの能力が特

に低下していると意識されている。

2) 6割を超える教員が学力低下が学部・学科で問題となっていると認識しており、1998年の国公立大学の学部長調査に比べ、学力低下傾向がより強く認識されている傾向が見られる。

3) 私立大学の教員においては、国公立大学の教員と比べると学生の学力低下意識が高く、またそのことが学部で問題となっている。

4) より年長で、教員経験年数の長い教員の方が学生の学力低下を問題として感じている傾向が見られる。

5) 専門教育に携わる教員に比べ、教養教育に携わる教員の方が学生の学力低下を強く意識している傾向が見られる。

6) 工学、理学、経済・商学、情報学、外国語学、文学などの学部では学生の学力が低下したと強く意識しているが、医学、体育学、保健・看護、介護・福祉などの学部ではそれほどには学生の学力低下を意識しておらず、学部間で、教員の評価する学生の学力低下意識には差が見られる。

7) 学生の学力低下の具体的内容としては、自主的、主体的に課題に取り組む意欲が低いことがもっとも強く意識されており、論理的思考力・表現力が弱いこと、日本語の基礎学力が低いことがそれに続いて強く意識

されている。

8) 学力低下対策として重要とされるものは、大学入学前においては、十分な科目履修と基礎的能力の教育、大学入学後においては、通常の授業において教員の言いたいことが学生によく理解されるような授業の工夫であり、リメディアル教育はあまり重要視されていない。

9) 学力低下対策としての入試方法としては、新しい入試方法を考案するよりは、従来の入試に、論理的思考力や表現力なども含めて判定をすることの方が重要視されている。

学生の学習意欲等に対する教員の意識としては、次の6点が明らかにされた。

10) 高校教科科目の学習の必要度は、1991年の調査と同様に、外国語が最も必要であると評価され、続いて国語、数学となっている。また、世界史は、1991年度と2004年度を比較すると、文学、教員養成学、農・獣・水産学ではほぼ同等であるが、それ以外の学部では、必要度は低くなっている傾向がみられる。

11) 大学教育で必要と思われるいくつかの資質のうち、最も必要度が高いと評価された資質は探究心であり、以下、論理的思考力、文章表現力、読解力、持続力、発想力などと続く。

これらの中で、教員からみた必要性の評価と学生の実態（身につけている程度）の評価とずれが著しい資質は、論理的思考力、探究心、文章表現力、発想力であり、これらのずれは、1991年度の調査と比較すると、2004年の調査では、より大きくなっていることが判明した。

12) 大学教育で必要とされる「20のスキル」の保有度について、その多くを大学入学時に学生が保有していないと評価している教員ほど、入学後の学生の学力低下を懸念している傾向がみられる。

13) 教員は、学生が思っているよりも、学生が講義方法に不満を持たず、講義内容を理解していると感じている

傾向がみられる。一方、学生は教員が思っているよりも、参考書、インターネット、図書館などを使い自分で調べているとしている。教員の講義方法に不満を感じる学生の多くは、講義で理解できなかったところを自分で調べ補っているものと推察される。

14) レポート添削の必要度に対する教員の意識と学生の意識の乖離は大きく、学生はレポートの添削を強く望んでいる。

15) 授業の改善法としては、ゼミナール方式の授業、実験・実習を多く取り入れた授業を、比較的多数の教員が実践している傾向がみられる。

